

■ シリーズ 僕の彼女と寝てみませんか？ ■

【体験版】

俺の彼女(セフレ)を抱きたいか？

— 椎葉学園二C、穴井乙女(あない おとめ) —

なつめ

なつめ

夏目 棗

□ □ 注意事項 □ □

普通にこのPDFファイルを開くとウィンドウサイズで開きます。パソコンの設定にも拠りますが多少縮小されて表示されるのではないかと思います。文章を読むには問題ありませんが、CGを鑑賞する場合は多少拡大(100〜125%くらい推奨)して戴いた方が綺麗に表示される筈です。

また、「Shift」＋「Ctrl」＋「N」で希望の頁へジャンプできます。

本作は立ち絵を何箇所か「パラパラまんが」風に配置していますのでPDFファイルを左右二頁見開き表示ではなく、単頁表示にしてクリックで進めて戴けるとより愉しめるかと思えます。

□□登場人物□□

● 穴井 乙女(あない おとめ) || 椎葉学園(しいばがくえん)二回生。
身長…164cm、体重…49kg、スリーサイズ…87(Dカップ)・52・88。



ガングロ、キンパツ、一人称が『あーし』。さらに、校則違反の網パンストを穿き、校則のネクタイもスルーしている……と、どこから見ても明らかにヤンキーでビッチだが、まあ、中身も『ほぼ』見た目どおりである。

……なのだが、実は『純』なトコロもある……らしい？

● 鹿島 玲子(かしま れいこ) || 椎葉学園(しいばがくえん)英語担当臨時講師。
身長… 168 cm、体重… 54 kg、スリーサイズ… 89(Eカップ)・59・87。



隣町の『私立埴菌(はなぞの)学園』から椎葉学園に週二回出張して来ている。(理由は多額の借金返済の為……とかいう噂だが、はてさて?)。
さばさばした性格で男女ともに学園生の人気は高い。

● 手代木 忽那(てしろぎ くつな) Ⅱ 椎葉学園(しいばがくえん)物理担当教師。
身長… 159 cm、体重… 65 kg、スリーサイズ… 103(Hカップ)・67・98。



“仏(ほとけ)の手代木”の異名を持つ『反省室』の管理人。その二つ名の由来はアルカイックスマイルばりの笑顔で平然と『反省室』行きを命じる姿からきたものだというのが、定説のようだった。

● 執行 正(しぎょう ただし) Ⅱ 椎葉学園(しいばがくえん)一回生。

真面目を絵に描いたような少年。クラスのワル共に填められた挙げ句、罰ゲームで乙女に『土下座告白』させられた。

● 依藤 功太(よりふじ こうた) Ⅱ 椎葉学園(しいばがくえん)三回生。

乙女の彼氏(↑乙女視点)。功太の認識では乙女は『セフレ』。学園生の彼に対する共通認識は『イケメンのチヨイ悪アニキ』。

放課後である。

穴井 乙女(あない おとめ)は……………途方に暮れていた。

——場所は校舎裏。

イマドキ珍しい(?) 下駄箱の中に入れられた『呼び出し』のお手紙。多分、果たし状ではないようだが、しかし色っぽい呼び出しのようにも乙女には思えなかった。

それでも乙女は『ここ』に来た。

そして、目の前には(多分、下級生の) 男子が—— “土下座” していた。

いまは彼氏が居るので全て断っているが、半年ほど前まで『ここ』は乙女の “プレイエリア” だった。

ガンダロ、キンパツ、一人称が『あーし』、校則違反の網パンストに校則のネクタイもスルー……と、見るからにヤンキーでビッチに思われていた(ただ、本人的にはビッチは有りだが、ヤンキーは無い) 乙女には、 “お誘い” が多かった。

そして、誘われれば乙女は殆んど断らず『ここ』で “遊んだ” のだった。

まあ、 “戴きモノ” がある場合もあった(いや、殆んど戴いていた) のだが。

しかし、この展開（土下座）は想定外だった。というか、初めての展開だった。何も喋らずひたすら土に額を押しつける彼に弱り果てた乙女は仕方なく訊いた。



「あーしにござうしろ、と？」

そこで初めて『彼』の身体が、びくつ、と動いた。

「……………え、えええ、えっ……………え、ええ、えっ、ち……………」



「は……………」

乙女はわざとらしく大きな溜息を吐いてみせた。尻窄まりに、ごによ、ごによ、と口にした彼が言わんとしたコトは、嫌でも乙女にも判ったからだ。

「悪いけど、あーし彼氏がいるから……無理っ！」

直球で断った乙女の言葉に、土下座少年の身体がまた、びくつ、と震えた。

半年前だったら「土下座」までされたら「戴きモノ」が無くてOKしていたかも知れなかった。

(悪いけど、縁が無かったっーコトで……んっ？ 『縁』でなく『円』か？ ……っつて、うふっ、うふふふっ♡)

「じゃあね……」

一応、そう声を掛けて立ち去ろうとした乙女に土下座少年が泣きそうな声で訴えた。
「ま、ま、ま、待って……くだしやいっ！」

乙女が振り返るとまだ彼は土下座したままだ。

(一回生みたいだし……何となく、イジメでさせられてるっぽいけど……あーしが答えてやる義理はないよね？)

可哀そうだがここは自力で解決しなさいよ……と、心の中で励まして立ち去ろうとした時、背後から馴染みの声が掛かった。

「乙女よう、探したぞ……って、何だコレっ？」

彼氏の依藤 功太(よりふじ こうた)が足元の土下座少年に素っ頓狂な声をあげた。

「もしかして、これって“あれ”か？」

「あれ……って、何？」

「この校舎裏で土下座すると、その時目の前に居た女子がやらせてくれる……とかいう“学園の七不思議”、みたいなの？」

「ぶっ♥」

「や、無いよな……うん、無い、ないっ！」

「ま、マジで……や、止めてよねっ！」

心底嫌そうに乙女が言った。

しかし、功太は何か乙女の素振りに違和感を感じたのだった。

「そうか、もしかして乙女……」

探るように乙女の目を覗き込んだ功太が続けた。

「……土下座されて濡れてんじや、ねっ？」

「ば、ババ、ばか、言っつて、んじや、ない、わよっ！」

(何だっ? ……乙女のヤツ、えらく動揺してんじゃんっ?)

顔を真っ赤にして、あからさまに上擦った声で否定する乙女に、功太は確信した。
「そんじゃ確かめても、良いよなっ？」
「い、良い……わ、よっ！」



乙女の強がりに功太は素早くスカートを脱がすとイキナリ股間に指を突っ込んだ。
「ひんっ♥」

乙女の喉から艶っぽい声が洩れた。

「お・や・あつ？」

「……………な、何よっ！」



尚も強がる乙女が可愛いやら可笑(おか)しいやら、功太が更に挑発する。

「パンスト越しじゃ、良く判らん……脱がすぞっ！」

「ちよ、っ！」

慌てて拒もうとする乙女の言葉を遮って功太が網パンストを摺り降ろした。
「なっ、まっ、ひいんっ！」



そのの股繰りを功太の中指が前後に擦る。

「あっ、ああっ♥……こ、功太の……ば、ばか、えっちい♥」
昂ぶりそうな嬌声(こえ)を必死に堪えて乙女が抗議の言葉を口にするが顔は早くも

アクメっていた。それを見た功太が思い出したように土下座少年を振り返ると彼は乙女の股間をガン見していた。

「少年、もつと良いモン見せてやろうか？」



功太は乙女の紐パンを解きスリットに中指を直に突っ込んだのだった。

「わひひひひひひんっ♥」

乙女の喉から間違えようのない嬌声が零れた。

「ほれ、少年……見えるか？」

乙女の背後に廻り両肩を押さえて功太が土下座少年に促す。

「コイツってば髪の毛を金髪に染めるだけじゃなく“ここ”も染めてるんだぜっ！」



「ここ、ここ、こら、功太っ！……は、はじめ、かしいっ！」
焦った乙女が盛大に嘔んだ。

「あははははっ！……乙女って、変なトコで『純』なんだよなっ♪」

「う、う、うるさいっ！……ばか功太っ！」

「まあ、まあ、濡れてたのは確かだし……正直になろうな、乙女さんっ♪」

「ち、違うからっ！……濡れてないからっ！……功太が、弄ったからだからっ！」

功太の手から逃れようと暴れる乙女を彼は手慣れた様子で後ろ手に（乙女から奪った紐ショーツで）縛ってしまった。

「ちょ、功太……ジョーダンきついつてえ！」

「まあ、まあ、まあ、任せろ……」

何を「任せろ」なのか意味不明だが、功太は気にする素振りも見せずに、背後からまた乙女の《秘唇》を弄（まさぐ）り始めた。

「やつ、やだ……やめ、んっ、あっ……だめ、あんっ♥」

拒む言葉の合間に艶っぽい嬌声（こえ）が交じる。

「おい、少年……ってか、お前、名前は？」

未だ土下座したままの（いや、顔は乙女の股間にホールドされていたが）少年に功太が訊いた。

「えっと……し、執行……執行 正（しぎょう ただし）です……」

些か、逃げ腰で正が答えると、功太が乙女の《秘唇》を二本の指で寛げた。
その瞬間、乙女の《秘唇》から、つう——と愛液が内股を伝い落
ちていった。



「正よう、俺が許す……舐めろっ♪」
「な、ななな、な、ナニ、を……でしゅかつ!?!」
訊くまでもないコトを訊いて視線を泳がす正に、功太が寛げた《秘唇》を指し示す。

「いっだ、いっっ！」

最早、我慢の限界を超えていた正が乙女の股間にむしゃぶりつく。

「いっくら、いっくら……にや、なめりゅ、にやあっ！」



身を振って怒りを口にする乙女の顔は、しかし、殆んど蕩け切っている。

「あっ、あっ、ああ、あんっ♥……りやめ、らから……あひい、ああ、あんっ♥」
背後から功太にシャツの上から胸を弄られ、正面から正に《秘唇》を舐められ、乙

女が官能を昂ぶらせてゆく。

いや、この異常な状況に昂ぶっていたのは乙女や正だけではなかった。

「お、おい、正っ！……後でヤラせてやるから、チョットどいてろっ！」



声と同時に乙女の股間から《ペニス》が生えた。

いや、いつの間に取り出したのか、背後から功太が《ペニス》を乙女の股の間に突き入れたのだった。

「ひいん、あひいんっ♥」

まるで《素股》よろしく功太の《ペニス》で《秘唇》を擦られ乙女が身悶える。

信じられない展開にその場に尻餅をついた正に構わず、幾度か《素股》で擦った功太は乙女の右足を抱えあげると、立ったまま背後から挿入してしまった。

「あひやあああ、いひいんっ♥……ば、ばか功太、ちんちん挿入(はい)ってる、いやあつ、ああっ♥……は、挿入(はい)ってる、ちんちん挿入(はい)ってる、てばっ!」
「落ち着け、乙女っ!……『挿入(はい)ってる』んじゃなくて『挿(い)れてる』んだっ!」

「だ、だつて……あつ、あつ……あの子が……あん、あつ……見てりゆう?」

「なんだ、乙女よう……見られて興奮してるのか?」

「ち、違つ……あひい、いん♥……こ、興奮してりゆうのは……ああ、あん♥……ばか功太の方りやつて……」

声を上擦らせて悶える乙女の《馴染んだ膣道》を《己が分身》で擦りながら功太が土下座少年に目を遣ると、何故か視線を逸らせて俯いていた。

「おい少年、じゃねえ正よう……良く見ておけよっ!……次はお前だからなっ!」
「い、いい、いや……ぼ、ぼ、ぼきは……」

幾分舌を縛れさせた正がこの場から逃げださなかったのは、功太の『後でヤラせてやるから』発言に期待したからでは無かった。

正直なトコロ、イキナリ始まった生えっち（生挿入、という意味ではない）に腰が抜けていたのだった。

「ば、ばっ！……あっち向いてろっ！」

功太の『良く見ておけ』発言に尻餅をついたまま、ちら、ちら、視線を向けてくる正に乙女が怒りをぶつける。

「ナニ言つてやがるっ！……乙女よう、見られて興奮してるんだろっ♪」

「な、無いから……あう、ああっ……見られて興奮……いひい、ひい……とか、無いから……ひん、あひい……しよこ、らめえええっ♥」

否定する言葉の合間に、激しい功太の突きあげを受けて、乙女が嬌声を洩らす。背後から《立ちバック》で突きあげる功太の責めに乙女の身体も上下に揺れる。

功太の言に拠ればソコもわざわざ金色に染めたのだという乙女の下草が、愛液やら汗やら、その他諸々の体液を撒き散らす。

「りやめえ、功太あ……お、奥ばつか責めりゆの、りやめえくっ!?」

小刻みに、ガク、ガク、と身体を震わせ、キュン、キュン、と絞めつけてくる膣壁

に違和感を覚えた功太が思わず訊いていた。

「お、おい、もうイキそうなのかつ？ ……って、そうか 見られてそんなに興奮してるんだっ ♪」

「ち、ちぎや…ああ、ああん…ちぎや、ちがう、きゃら…ああ、ああ♡
否定する言葉を自分の身体に肯定されて、乙女が呆気なく昇り詰めてゆく。

「や、やだ、らめえ…いいい、いつきゆ、いきゆ、いい、いつきゆうううっ♡
乙女の身体が、びく、びく、びっくん、と震え、小刻みに達し始めた。

「そうか、見られてるのが、そんなにイイんかつ？」

「こうひや(功太)の、ばか…っ…いつひやう、いつひやへる、きゃら…っ
…ああ、ああ…いきゆ、いつきゆ…ああ、ああ…い、いい、いつきゆう、
いつきゆううううううううううううううううっ♡」

自分の言葉が“呼び水”となつて、乙女は呆気なく達してしまった。

そして、前のめりに、がくんっ、と崩れそうになった乙女の身体を抱きとめて、功太は仕方なさそうに《ペニス》を抜いたのだった。

「まだ俺はイってないってのっ！」

ボヤいた功太だったが、直ぐに思い直したように頷いた。

「まあ、なんだ……俺がぶちまけた後じゃあ、童貞くんが可哀そうってモンだよな……おい、土下座少年……じゃなくて、正よう……待たせたなっ♪」

まだ些かふらついている乙女を抱き起して、功太は彼女の下半身を正に向かって突きださせた。所謂(いわゆる)《後背位》ポジションである。

「にや、にやにい？」

半覚醒状態の乙女が功太を見あげる。

「良いんだ、乙女……そのまま俺に捕まってケツを突きだしとけっ♪」

「……んっ？ ……わきやった(わかった)……」

乙女が自分の首に両腕を廻したのを確認して、功太が正に『来い、こい』とばかりに右掌を上向けて、くい、くいっ、と合図した。

「……で、でも……ほ、ぼく、は……」

覚悟が決まっていないのか正が躊躇(ためらい)いを見せた。

そんな彼に向かって唇に指を立てた功太が、もう一度、右掌で煽った。

「……ぐびっ！」

正の「決意」が思いのほか大きく響いた。

彼は功太から視線を逸らして、おず、おず、と学生ズボンを脱ぎ、真っ白いブリー

フから（そこには先走りの大きなシミがあった）苦勞して《逸物》を取りだした。

「でけえっ！」

思わず叫んだ功太は慌てて口を押さえて、更にもう一度、右掌で『来い、こい』と煽った。

ここまでお膳立てをして貰って、流石に正も覚悟を決めたようだった。

自分に向かつて突きだされた柔尻の谷間に、自分が向かうべき「穴」があった。

充分に潤って彼を待っている「穴」に、正は右手で握り締めた《逸物》を宛がった。

先端が、ぬふんっ、と泥濘（ぬかるみ）に誘い込まれたのが判った。

今回の体験版Ver. 02は「」までです。本篇をご期待戴ければ幸いです。